現代のことば

安成（やすなり） 哲三（てつぞう）

「千年の都」の条件

京都は794年に平安遷都以来、1869年の東京遷都まで実に約千百年間、日本の都として続いた。現在も、約150万人を抱え、伝統産業を基盤にした独特の産業や学術・文化を担う大都市として日本のみならず、世界に発信している。世界の首都や大都市をみても、京都のようにほぼ同じ地理的場所に千年以上も都として続いてきた都市は非常に少ない。なぜこのようなことがありえたのだろうか。

もちろん、さまざまな自然的・地理的・社会的要因が絡んでおり、そう簡単には説明できないが、最も重要な自然的条件は、「水」であると、私は考える。

周囲を北山、東山、西山に囲まれた京都盆地は、500万年前頃から、これらの山々がゆっくりと隆起する過程で、山間の広い低地に土砂が厚く堆積して形成された。その堆積層は最も深いところでは800㍍にも達し、周りの山々から流れ込む水により厚い地下水層が形成されていることが、関西大学の楠見晴重教授（現学長）らによって明らかにされている。鴨川や桂川などの河川水に加え、盆地内での豊かで良質の地下水は、おいしい酒や豆腐、湯葉などの食文化の形成にも大きな役割を果たしてきた。

鴨川や桂川は時として洪水を引き起こし、京都の人たちを苦しめてきたが、水の恵みはその災いを補って余りあるといえよう。水源の確保と水害防止のため、北山周辺の森林保護は現在も自治体により行われている。明治に入ってからは琵琶湖疏水が造られ、現在の京都市の上水道は大部分が琵琶湖からの水によっている。いずれにせよ、京都は、豊富な地下水と琵琶湖という大きな水がめにより、現在まで豊かな水により成り立ってきた都市といえよう。

人類が農耕と都市文明を開始してからすでに1万年近くになるが、メソポタミア文明やインダス文明など、気候変動や河道の変化、森林破壊などにより水の恵みが絶たれたために消えたとされる都市文明は多い。現代でも、中国の首都北京は、年間降水量は600㍉以下という乾燥の気候下に2千万人を超える人口をかかえ、慢性的な水不足に悩んでいる。その解決のために南の長江から水を北京に運ぶ大土木事業「南水北調」が進行している。この事業の成否は、首都北京の発展・存続の鍵を握っている。

日本列島はモンスーン気候のため、水資源は豊かと思われているが、決してそうではない。降水の季節が梅雨や台風など短期間に限られている上に、急峻（きゅうしゅん）な山岳地形のため、降った水の多くは短くて速い流れの河川を通して海に逃げてしまうからである。その点、冬の季節風による雪は貴重な水資源であり、京都を含む関西の都市圏にとって、琵琶湖周辺の山々での雪は大切である。

「地球温暖化」に伴うこの地域の雪や雨の変化が水資源にどう影響するか気になるが、もうひとつの懸念は水質の変化である。1970年代に頻発した琵琶湖の赤潮発生は最近はみられないが、湖周辺の都市化の進行は水質にもじわじわと影響している。さらなる懸念は若狭湾に集中する原発の存在である。万が一の事故により降水や湖水の放射能汚染が起これば、「千年の都」も瞬時にしてその歴史を閉じる可能性を、私たちは肝に銘じておかねばならない。（総合地球環境学研究所長・地球環境学）